【55】災害関連死をなくそう

近年の災害の増加に伴い、地震、水害等の災害時に、市町村から避難指示が発令され、住民が近くの避難所に避難する機会が増えました。

問題は、災害を逃れてせっかく避難所に来たのに、食事の不安定、安眠できないこと、不潔なトイレ等の生活環境の急変により、体調を崩したり、持病をこじらしたりして亡くなる人が、高齢者を主体に増加していることです。

災害による直接の死者と区別して "災害関連死" と位置づけられています。

平成 7 年（1996）の阪神淡路大震災、平成 23 年（2011）の東日本大震災で災害関連死者数がそれぞれ数千人にのぼったことから、社会的関心事になり、内閣府の音頭取りでその対策が進められてきました。

昨年の能登半島地震では、直接の死者と災害関連死者の人数が、絶対数は全体で数百人ですが、同程度の数となり、改めて災害関連死対策に注目が集まっています。

避難所というと一時的なものという先入観があり、広い面積がとれて大勢の人を収容できるという点から、又、市町村の管理下にあることから、小中学校の体育館が充てられることが多いのですが、硬い冷たい木の床にシートを敷いただけで毛布にくるまって雑魚寝するのですから、健康な人でも何日も続くと耐えられませんし、ましてや高齢者では苦痛でしかありません。

わが国では、長年にわたる災害の経験の上に、河川や道路等のインフラ施設の災害復旧の制度はよく出来ているのですが、一般住民を対象にした避難システムや災害が収まった後の "生活復旧”は全く不十分です。

避難所のシステムは、ヨーロッパのイタリアでは、食事付きの安ホテル並みの環境が用意されているとのことですが、災害先進国の日本では、この面の対応が遅れています。

この頃、キャンピングカーのような感じのよいトイレ車がアメリカから導入され、先進的な地方自治体が所有し、被災地へ救援に駆けつけていますが、この程度のものはその気になればとっくにわが国で開発されているはずのものです。

私は、スーパーマーケットで売っているレトルト食品を手間が簡単でおいしいので、近年愛食していますが、避難所の食事もレトルト食品を導入したら良いと思います。

避難所のための対策は、災害が無ければ無駄になるわけですが、避難対策のための施設整備や物資の備蓄が無駄になることが、実は社会全体にとって幸せであるとの意識改革が望まれます。

今、その設置を議論されている防災庁が、そういう考えの先頭に立ってくれることを期待します。